

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The mysterious distinction between count and noncount nouns

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 治彦, YAMAGUCHI, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2021

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



可算と不可算の不可思議

—学校英文法から英語学の発想へ—

山口治彦

1. はじめに：数えられるのに数えられないなぞ

「私は英語のここが嫌いだ」というタイトルで新入生に短い作文を書いてもらおうと、皆がよく選ぶトピックに可算名詞と不可算名詞の区別の問題があります。たとえば、こんな感じです。

- (1) 私が納得いかない点は、日本語では数えられる名詞が不可算名詞になっていることだ。たとえば *paper* や *ice* など、日本語では枚数や数を数えられるものが、英語では数えられないことだ。

日本語の母語話者なら、上のような疑問を持った人も多いのではないのでしょうか。実際、可算・不可算の区別は非母語話者には分かりにくいものです。感覚的にきちんと理解しているネイティブスピーカーにしても、その区別を論理的に説明するのはとてもむずかしい。では、文法書はどのような説明をしているのでしょうか。これまでよくなされてきた説明は、たとえば次のようなものです。

(2) 可算名詞 (Countable Nouns)

英語として、一定の形や限界があって数えられるとされるものを表す名詞で、数えられる名詞ともいう。普通名詞と大部分の集合名詞がこれに属し、辞書では *countable* の頭文字をとって **C** と表示されることが多い。

[中略]

不可算名詞 (Uncountable Nouns)

英語として、個数で数えることはできないとされるものを表す名詞で、数えられない名詞ともいう。固有名詞・物質名詞・抽象名詞・一部の集合名詞がこれに属し、辞書では *uncountable* の頭文字をとって **U** と表示されることが多い。
(綿貫ほか 2000: 81)

上の説明では、「一定の形や限界があつて」のところのみが可算名詞の意味的な特徴について記述しています。ですが、具体的な説明がないので「一定の形や限界が」あることがどのようなことなのか、一般の学習者には分かりかねるのではないかと思います。だから、この説明を読んでも、読者には「数えられる」ものを指すのが可算名詞、「数えられない」ものは不可算名詞ということになり、疑問の出発点から一歩も踏み出せません。(ちなみに、「綿貫ほか 2000: 81」というのは、章末の参考文献表に挙っている綿貫、宮川、須貝、高松が 2000 年に書いた本 (『ロイヤル英文法改訂新版』) の 81 ページを指します。そこから引用したという意味です。英語学ではこういうふうに、参考文献を略記します。)

また、辞書で **C** や **U** という表記があることに言及するのは、学習者に対して実際に役立つ情報を与えるためだと思います。ですが、私には「ぶっちゃけた話、可算・不可算の区別はよくわからないだろうから、その都度辞書を引いて調べなさい」と読者を突き放しているかのようにも思えます。(しかも、辞書は **C** や **U** の区別をつける割には、その区別について納得のいくようには説明してくれないのがふつうです。)

可算・不可算の区別についてももう少し丁寧に説明しているものとしては、表-1 のようなリストを挙げるのがあります。表-1 は(2)の説明よりは具体的ですが、どのような特徴を持つものが不可算名詞となるのか、その説明はありません。読者は、表に挙げられた 10 のグループに共通する特徴を見出すことができず、不可算名詞の成立ちに対し不可解な印象をぬぐい去ることができません。結局のところ、可算と不可算の区別については見当がつかないままです。

このような状況にいたったとき、よくあるのが「覚えよ、さらば救われん」という考え方です。理屈は抜きにしてとりあえず暗記しなさい。英語話者はそういうふうに英語を話すのだから仕方ないでしょう、という乱暴な考え方です。思えば、この「覚えよ、さらば救われん」は、学校英文法のそこそこに見受けられます。覚えた規則を数学の公式のように当てはめたら、文法の問題は一応解けるわけです。だから、英文法に対して、暗記と当てはめという印象を持つ人がとても多い。しかし、そういった機械的なやり方になじめない人も少なくないのではないのでしょうか。

表-1：エイザーによる「主な不可算名詞」(エイザー 2005: 18)

(a) 似通ったものの集合体： <i>baggage, clothing, equipment, food, fruit, furniture, garbage, hardware, jewelry, junk, luggage, machinery, mail, makeup, money/cash/charge, postage, scenery, traffic</i> など
(b) 液体： <i>water, coffee, tea, milk, oil, soup, gasoline, blood</i> など
(c) 固体： <i>ice, bread, butter, cheese, meat, gold, iron, silver, glass, paper, wood, cotton, wool</i> など
(d) 気体： <i>steam, air, oxygen, nitrogen, smoke, smog, pollution</i> など
(e) 微片： <i>rice, chalk, corn, dirt, dust, flour, grass, pepper, hair, salt, sand, sugar, wheat</i> など
(f) 抽象概念： -- <i>beauty, confidence, courage, education, enjoyment, fun, happiness health, help, honesty, hospitality, importance, intelligence, justice, knowledge, laughter, luck, music, patience, peace, pride, progress, recreation, significance, sleep, truth, violence, wealth</i> など -- <i>advice, information, news, evidence, proof</i> など -- <i>time, space, energy</i> など -- <i>homework, work</i> など -- <i>grammar, slang, vocabulary</i> など
(g) 言語： <i>Arabic, Chinese, English, Spanish</i> など
(h) 学問の領域： <i>chemistry, engineering, history, literature, mathematics, psychology</i> など
(i) 娯楽： <i>baseball, soccer, tennis, chess, bridge, poker</i> など
(j) 一般的な行動： <i>driving, studying, swimming, traveling, walking</i> など(およびその他の動名詞)
(k) 自然現象： <i>weather, dew, fog, hail, heat, humidity, lightning, rain, sleet, snow, thunder, wind, darkness, light, sunshine, electricity, fire, gravity</i> など

だって、おかしくはないですか。英語のネイティブスピーカーは、当該の名詞が可算なのか不可算なのか瞬時に判断します。だとしたら、それが液体や気体だから不可算だとか、物質的だから不可算だとか、表-1に整理された知識に照らし合わせて英語を話しているのでしょうか。そんなことをしていたら、名詞を使うたびにっつかえてしまって、スムーズに会話することなんて不可能です。母語話者がストレスなく瞬時に判断できるためには、可算・不可算の区別についてもっと分かりやすい、単純なルールが存在するはずです。少なくとも不可算名詞を丸暗記するよりは、使い分けのルールを「なるほど」と理解するほうが断然おもしろいし、実際のコミュニケーションにも生かしやすいのではないのでしょうか。¹ 以下では「なるほど」と理解するために、そして、きちんと論理的に考えていくために、上で取り上げた学校英文法の説明に英語学の立場から改訂を加えていこうと思います。皆が疑問に思うトピックに対し、英語学の思考法でアプローチしてみます。

¹ ここで書いたような考え方にのっつくと可算と不可算のしくみを説明しようとする文法書も最近になってようやく見られるようになってきました。大西・マクベイ(2011)や田中(2013)がそうです。

2. 学校英文法に欠けていること（その1）：ふたつの「数える」

可算と不可算の不思議について論理的に考察するためには、まずその前提となる発問がきちんとできているか確認する必要があります。先ほどの(1)に戻りましょう。この文章の考え方には、どこか問題はなかったでしょうか。

「日本語では数えられる名詞が不可算名詞になっている」とありました。そして、「*paper* や *ice* など、日本語では枚数や数を数えられるものが、英語では数えられないのだ」と主張します。このふたつの「数えられる」は、同じ意味で使われているのでしょうか。「日本語では数えられる」というときの「数える」は1枚、2枚、1個、2個と数え上げる行為を指しています。日常語で言う「数える」です。他方、「不可算名詞になっている」という意味での「数える（数えられない）」は、文法や言語学でいう意味の「数える」であり、それは *book* が "a book" や "books" となるように、単数や複数の意味合いを名詞に印を付けることで表せるということを意味します。日本人の学習者に広く見られることですが、(1)の筆者はふたつの異なる「数える」を混同しています。(1)の疑問は、だから事実を誤ってとらえているのです。残念ながら、そのような論理上の見落としがあるところに正しい答えは訪れません。

よくよく考えてみると、日本語では、文法・言語学のいう意味では数えていないことに気づくはずです。複数冊ある本を「本ズ」とは呼びません。何冊あろうと本は「本」です。「本を3冊」という表現は、文法的には本を「数えて」いないのです。日本語は数の概念を名詞に印をつけることで表現したりしません。母語である日本語と外国語である英語の姿をきちんと見据えて、日本語の理屈と英語の論理について考えることが、可算・不可算の問題を理解する出発点になります。

こう言うと驚く人が多いのですが、日本語の名詞は原則として不可算名詞です。だから、日本語の名詞の数え方は英語の不可算名詞の数え方と似ています。

- (3) a. 本3冊, ネコ1匹, オレンジいくつか
 b. 紙3枚, パン1枚, コーヒー2杯
 c. three books, a cat, some oranges
 d. three sheets of paper, one slice of bread, two cups of coffee

英語では、(3c)の可算名詞と(3d)の不可算名詞のふるまいはもちろん異なります。可算名詞は単数と複数の区別があるので、それに見合った数詞や冠詞が前に位置すればかたちは整います。他方、不可算名詞で表されるものについては、"three sheets of"のように名詞の意味に応じた形式を用いないと数え上げら

れません。このやり方は、日本語で物の個数を数え上げる形式 [名詞+数詞+助数詞] (「ネコ」+「1」+「匹」) とよく似ています。そして、(3a)と(3b)に見るように日本語には可算と不可算の区別は存在しません。日本語の名詞は皆同じように、英語の不可算名詞と同じように、ふるまいます。

ここで最初の疑問に立ち返って、認識を改める必要があります。問題は、「日本語では数えられるのに、英語では数えられないものがある」ということではなく、「日本語では(名詞に印を付けるというかたちでは)数えないのに、英語ではわざわざそういうふうに数えることがある」、が正しいのです。

日本語で複数をかたちで表すことの出来るのは、「山々」、「人々」、「木々」といった繰り返しが可能な名詞(と「たち」「ども」「ら」をつけることができるごく一部の名詞)だけです。それなのに、日本語では英語の可算名詞と同様に「数えられる」と考えてしまう。なぜでしょうか。英語を学ぶ過程で英語と日本語をきちんと対照できていなかったからではないでしょうか。英語を(不十分に)学んだせいで、日本語の知識がゆがんでしまったとしたら、それは悲しいけれど本末転倒です。本来、外国語と比べることで母語の知識を相対化し、複数の視点を獲得することに外国語を学ぶ大きな理由があったはずです。英語について学ぶことで日本語についても理解が深まる、それが目指すべき望ましい状態です。日本の英語教育は日本語をきちんと見つめていません。この問題については、この章の最後でもう一度考えます。

3. 学校英文法に欠けていること(その2): どちらが基本か

(1)にはほかに問題があります。「*paper* や *ice* など、日本語では枚数や数を数えられるものが、英語では不可算名詞になっている」とありますが、この考え方にも注意が必要です。*paper* と「紙」を同一にとらえる考え方です。

幸い、*paper* と「紙」、*ice* と「氷」はあまり意味が異なりません。(もともと、*paper* には「紙」にはない意味、つまり、「新聞」や「文書」「論文」などの意味があり、こちらは可算名詞です。)だから、この場合、たいした問題は生じません。しかし、たとえば *finger* を「指」、*furniture* を「家具」とまったく同じだと考えると問題が起きます。*finger* は足の指を含みませんし(足の指は"toes"), 親指(*thumb*)をとときき排除します。だから、*finger* と「指」は、常に同じ物を指すとは限りません。*finger* は英語という環境において *thumb* や *toe* と対立しながら意味を持つのに対し、「指」は日本語の語彙体系(*thumb* や *toe* のような基本的語彙を持たない)のなかでその指示対象が定まります。

同様に、*furniture* と「家具」のあいだには、(後で述べますが)若干のニュアンスの違いが見られます。そして、*furniture* を「家具」と完全に同一視してしま

うと（そして、日本語の名詞が不可算名詞であるということを理解しないままだと）、なぜ *furniture* が不可算名詞なのか理解できなくなります。英語の可算・不可算の問題を考えると、できるだけ日本語を介さず、学習者用の英英辞典（『ロングマン現代英語辞典』(Longman Dictionary of Contemporary English) や『マクミラン英語辞典』(Macmillan English Dictionary) など）を使って英語の意味そのものをとらえるよう努力すべきです。（ちなみに、英和辞典に挙っているのは訳語です。必ずしも語の意味を説明してくれるわけではありません。）

また、(1)には明示されていませんが、やはり日本人学習者が（いや、一般に多くの人が）一様に誤解していることもあります。それは、可算名詞を基本とする考え方です。そして、不可算名詞はちょっとよく分からない英語（欧米語）独特の形式と考える人も多いようです。ところが言語学の観点からすると、不可算名詞こそが基本的な形式なのです。どちらかと言えば、独特なのは可算名詞なのです。

ために、中学校の英語の教科書を思い出してください。最初に出てくる普通名詞は何だったでしょうか。たとえば、“I like ...”という表現の後にどのような名詞が来るとおもいますか？たいていは、*music* や *soccer* などの不可算名詞なのです。なぜでしょうか。

いきなり“I like cats.”という文を出してしまうと、*cat* に-s がくっついてくるのはなぜか説明せねばなりません。また、“I have a cat.”のように単数で可算名詞を提示すると、日本語には存在しない冠詞についても教えないといけません。だから、一度に多くのことを提示しすぎることのないように、まずは不可算名詞という基本的な形式からはじめる教科書がほとんどです。英語の可算名詞は、日本語の名詞にはない文法規則を複数背負っており、その分だけ明らかに複雑なのです。それなのに、なぜ可算名詞のほうを基本と考えるのでしょうか。

可算名詞が身近で具体的な物を指すことが多いことも原因でしょうが、一番大きな理由はネーミングにあると思います。「可算」と「不可算」という区別は明らかに「可算」のほうを基本としているからです。「可算」という概念が先にあって、その反対の「不可算」は「可算」から派生した概念であるとする考え方がこのネーミングには窺えます。だから、「可算」「不可算」という用語を使っていると、自然と可算名詞のほうが基本的な存在で、不可算名詞は特殊なものであるとの印象が強くなってしまいます。

しかし現実には、何もかたちが変わらない不可算名詞のほうが基本的な存在なのです。ことばに形を伴って現れているかどうかは、英語学（そして広く言語学）にとってしばしば重要な観点となります。言語学で大事なものは、印象よりも形です。不可算名詞は-s や-es でわざわざ特徴づけられることはありませんし、

不定冠詞を伴うこともありません。こういう形式を言語学では無標 (unmarked) と言います。無標とは何も印がついていないことを意味します。無標の形式は、たいてい形式的に単純で、一般的な存在です。これに対して、可算名詞は有標の (marked) 形式となります。不定冠詞や *-s* や *-es* という印を伴うからです。意味的にも、(後でくわしく見ますが) 当該の対象が個物としてのまとまりを持つ、という不可算名詞にはない要素 (意味) を持っています。形式的にも意味的にも可算名詞のほうが不可算名詞に比べて「余計な」物を背負っているのです。

このように考えると、可算・不可算という名称を変更して、不可算名詞を「一般名詞」、可算名詞を「特別可算名詞」と呼んでもいいくらいです。そのほうがことばの現実には近いのです。

4. 学校英文法に欠けていること(その3) : 対立のパターン

可算と不可算の問題を正しくとらえるために、もうひとつ重要な概念があります。それは、可算名詞と不可算名詞との対立関係です。両者の対立関係を正しくとらえることが、可算・不可算の論理を理解するのに必要です。ここでは話を簡単にするために意味的な対立関係を2種類だけ取り上げます。手はじめに以下の対義語 (antonym) のペアを2種類に分類してみてください。

(4) alive/dead	beautiful/ugly	big/small
expensive/cheap	false/true	good/bad
hot/cold	on/off	present/absent

beautiful/ugly と同じグループに、big/small, expensive/cheap, good/bad, hot/cold を分類できたでしょうか。これらのペアには段階性があります。だから、これらの形容詞には比較級と最上級があります。また、美しくも醜くもないような中間領域が存在します。

これに対し、alive/dead の関係は、片方が成立すると他方は成立しません。生きていることは死んでないことを意味し、死んでいることは生きていないことを意味します。両者の中間領域は存在しません。false/true, on/off, present/absent についても同様です。このような対立関係を相補的な (complementary) 対立と呼びます。

では、可算名詞と不可算名詞の対立は段階的な対立と相補的な対立のどちらでしょうか。不可算名詞であるということは可算名詞ではないということです。可算・不可算の対立は相補的な対立です。相補的な対立は世界を切り分けるときに便利な方法です。英語母語話者は可算・不可算の対立によってあり

とあらゆる実体を二つに切り分けているのです。日本語の見方とその点が決定的に違います。

そして、この相補的対立が不可算名詞にまつわる見かけ上の複雑さを理解するヒントとなります。不可算名詞の見かけ上の複雑さとは、表-1において見たように、液体や気体、微片、抽象概念に学問領域といったさまざまなものが不可算名詞によって表されており、共通する特徴が見つげづらいことを指します。

試しに、次の3者に共通する特徴は何でしょう。

(5) イヌ, サル, キジ

上の3者は鬼退治というきわめて危険な労働に対して、きびだんごのみの報酬で桃太郎にリクルートされた動物達です。この程度なら、共通項は簡単に見つけられます。では、次のグループはどうでしょうか。

(6) イヌ, サル, キジ, ウサギ, タヌキ, カニ, ツル, カメ, スズメ, ネズミ

桃太郎を引き合いに出したので、日本の昔話に登場する動物の集合だと予想するのは容易かもしれません。ただ、(6)には見逃しやすい特徴が一つあります。それは、人間ではない、という否定的な特徴です。実際、「動物」ということば自体、生物を二分したときに植物と対立する存在を表すと同時に、動物のカテゴリーの中でも人類以外のもの(獣)を指すこともあります。通常、一つのグループが与えられると、私たちはそのグループが共通して持っている特徴に目を走らせます。しかし、一つのグループが共通して欠いている否定的な特徴には関心が及ばないことが多いのです。

では、もし、あるグループが否定的な特徴のみによってひとくりにされていたらどのようなになるでしょうか。たとえば、(6)のグループに日本の民話には登場しないジャイアントパンダとダチョウを加えてみましょう。すると、一見したところ、人間以外の生き物という特徴は見えにくく、ほ乳類(イヌ, サル, ウサギ, タヌキ, ネズミ, パンダ)に鳥類(キジ, ツル, スズメ, ダチョウ), は虫類(カメ)に甲殻類(カニ)と、さまざまな生き物が寄せ集められた雑多な印象がします。

英語の不可算名詞について同じことが言えます。不可算名詞は、名詞のグループから可算名詞という特定の集合を取り出した残りを表します。そして、それ以外に不可算名詞を縛る条件はありません。可算名詞は、後で述べるように、一定の特徴を共有しているのに対して、不可算名詞はその特徴を持たないグル

ープとしてのみ規定されます。だから、液体や気体、物質的な物、抽象物、集合的な物など、一見したところ共通項のない雑多なグループとして見られがちなのです。これが、不可算名詞の見かけ上の複雑さがもたらされるからくりです。「見かけ上」といったのは、いったん理屈が分かってしまうと、複雑さは解消されるからです。

5. 可算・不可算の実際

これまでの観察結果を総合すると、英語学習者にとっての指針が一つ浮かび上がってきます。可算名詞と不可算名詞の区別は、基本的に、可算性があるかないかに着目するだけでよいのです。不可算名詞にどのようなものがあるのか気にする必要はありません。わざわざ可算のかたちにするだけの理由がなければ、不可算として扱えばいい。そういうことです。では、どのような概念なら（可算名詞というかたちで）数えることができるのか、まずはいくつかの例をもとに考えてみましょう。（以降は「数える」を文法・言語学で言う意味で用います。）

(7) Cats sometimes kill small animals and birds.

(*Longman Dictionary of Contemporary English = LDOCE*)

まずは、典型的な可算名詞 *cat* からはじめます。ネコには明確な形状があります。頭があって胴体、前脚、後脚、尾、というように。そして、この形状は有機的なまとまりを持った全体として認知されます。そうすると個体として認めやすい。さらには、同じような形状をした異なる個体が並び立つことを容易に想像できます。このような形式的特徴を持つものは、可算名詞を用いて言及されます。

(8) a. the thrill of catching a really big fish

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary = OALD*)

b. One usually drinks white wine with fish.

(*LDOCE*)

fish には *cat* と似ているところとそうでないところがあります。(8a)は大物を釣り上げる時の興奮について語っていますが、魚は目があって口があって、尻尾も背びれもあります。そういうふうに形状が一定に定まっていると、やはり個として認知しやすい。しかも、ほかの個体も同じような形状でしょうから、多数のなかの一つとしてとらえやすくなります。ここまでは、*cat* と同じです。

(もっとも *fish* は基本的に単複同形ですので、魚の種類について言及するとき以外は、"fishes" という複数形にはなりません。)

しかし、同じ「魚」であっても魚の身について言及したいときは事情が異なります。私たちが口にする魚の身は *meat* と同様、いかようにも切り分けることができます。「魚にはふつう白ワインを合わせる」というときの「魚」は、一匹丸ごとの魚をイメージしているのではなく、たとえばムニエルにするときの魚の肉を想定しています。すると可算名詞としては使いにくくなります。ちなみに、ワインのような液体も、*water* や *coffee* と同様、たいていは数えることができません。液体は個物として認知されるだけの固定的な形状を欠いています。

ここで注意したいのは、単語ごとに可算か不可算か決まっているのではない、ということです。どのような意味を表したいかによって可算名詞とするのか、不可算名詞とするのかが決まります。「可算用法」「不可算用法」ということばを使ってもいいでしょう。

同様に「卵」に対しても、どのようにとらえるかによって可算・不可算の使い分けがなされます。

- (9) a. I had an egg this morning.
 b. You have egg on your chin. (久野・高見 2004: 2)

たとえば、ゆで卵を1個食べたのなら、卵丸ごと1個を食べたことになります。卵は、黄身があって白身があって、その外側を殻が覆っている。1個1個、明確な形があります。すると、*egg* は(9a)のように可算名詞として使われます。ところが、「あごに卵ついてるよ」と言うときは、卵が丸ごと1個あごに引っ付いているわけではありません。その食べかすが(ちょっとかっこう悪いですが)あごについている訳です。「食べかす」は定まった形がある訳ではなく、どのような形状にもなります。すると同じものが並び立つことは想像しづらくなり、数えにくくなります。

- (10) a. There's a hair in my soup. (OALD)
 b. The cat has left white hairs all over the sofa. (LDOCE)
 c. Jane has long blond hair. (『ジーニアス英和大辞典』)

髪の毛もとらえ方によって可算・不可算が変わります。気分のいい話ではありませんが、(10a)のようにスープに髪の毛が1本浮かんでいますと、髪の毛1本を個物として認めたくなるようです。定まった形状をしており、同じものが

並び立つことが可能です。だから、ネコの毛1本1本がたくさんついていることを問題とする(9b)では、複数形になります。ところが、人の髪型や髪の毛全体を問題にしたいときは、髪の毛1本1本に目が行く訳ではありません。頭の髪の毛の部分は、魚(1匹)や卵(全体)のように明確で定まった形状を持つわけではなく、人それぞれによって異なります。また、髪の毛(髪型)は、個人それぞれに対し備わるもので、それをひとつふたつと個人の枠を越えて並べ立てる必要がそもそも存在しません。すると、わざわざ数える必要がなくなり、(10c)のように不可算用法でしか用いられないのです。

sleep にも不可算用法と可算用法の両方があります。

- (11) a. Babies need a lot of sleep. (Macmillan English Dictionary=MED)
 b. Did you have a good sleep? (OALD)

日本語では(11a)と(11b)の *sleep* の区別はつけづらく、「赤ちゃんはたくさん眠らないといけない」と言うときの"sleep"も、「よく眠れましたか」と問うときの"sleep"も、どちらも「眠り」でいいように思います。ですが、(11a)は"the natural state of resting your mind and body, usually at night" (LDOCE)というふうに、精神と身体を休める自然な状態のことを指します。はじめも終わりもよくわからない、眠りの状態もしくは行為一般を漠然と指しますので、可算用法となるだけの個別性がそもそも存在しません。一方、(11b)は、LDOCEでは"a period when you are sleeping"と説明されていますが、夜に就寝してから朝に目覚めるまでの1回の眠りのことを指します。こちらは、はじめと終わりが明瞭で、全体を一個の物として措定しやすい。容易に繰り返すこともできます。すると可算的にとらえやすいのです。

- (12) a. You've got a lot of experience of lecturing. (LDOCE)
 b. Failing an exam was a new experience for me. (LDOCE)

(12a)は「講義の経験がたくさんおありですね」と述べますが、そこで用いられる *experience* は、"the knowledge and skill that you have gained through doing sth for a period of time" (OALD)と説明すべきもの、つまり一定期間何かをすることで得られる知識や技術の総体を指します。(ちなみに OALD の定義における *sth* とは *something* の略です。)かなり抽象度の高い概念で、可算用法には適していません。これに対し、「試験に落第したことは自分にとって新たな経験だった」

という(12b)における「経験」は、何らかのかたちで人に影響を与える出来事や行為 ("an event or activity that affects you in some way" (OALD)) のことを指しています。出来事や行為の意味で言う *experience* は、可算用法の *sleep* と同様、はじめと終わりがはっきりしているためほかのものと区別がつきやすく、また同じものを繰り返すことが可能です。すると、可算用法として使えるのです。

さて、いくつかの例を取り上げて可算・不可算の区別について説明しましたが、どのように区別されるのかイメージがつかめたでしょうか。この節での観察をもとに可算用法と不可算用法の使い分けの基準について次節でまとめてみます。

6. 可算のための条件、もしくは *furniture* が数えられない理由

5 節で行った観察をもとに可算名詞となるための条件をまとめると、以下のようになります。

- (13) a. 境界性 (boundedness) : 明瞭な輪郭を持つ。
- b. 全体性 (wholeness) : まとまりのある全体を形作る。
- c. 反復可能性 (repeatability) : 似たものを並べることが可能

(13a)の境界性については、Langacker (1987)をはじめ、複数の論者が可算のための基本的条件と認めています。これだけを可算性のための条件としてもよいのですが(実際、(13a)の境界性は(13b)の全体性や(13c)の反復可能性がきちんと成立するための前提条件でもあります)、学習者の目線で見るとき、(13)のように条件が複数あったほうが、可算のための目安として分かりやすいのではないかと考えました。(13)の特徴を多く備えるものほど、典型的な可算名詞としてふるまう、というふうと考えてみるわけです。表-2はおもな名詞にこの三つの特徴を照らし合わせた結果をまとめたものです。

表-2: おもな名詞と可算性の度合い

	<i>cat</i>	<i>apple</i>	<i>pencil</i>	<i>chalk</i>	<i>paper</i>	<i>furniture</i>	<i>water</i>
境界性	○	○	○	×	×	×	×
全体性	○	○	△	×	×	△	×
反復可能性	○	○	○	△	△	×	×

cat や *apple* は、形状の境界が明確で、それぞれの個体が有機的なまとまりを持った全体であり、その個体を繰り返し並べ立てることが可能です。*pencil* は、

削っていても鉛筆と認知できるので全体性については△にしました。chalkは粉のかたまりで、その形状が一定であらねばならないわけではありません。だから境界性を×にしました。furnitureは不可算用法であることがなぞに思われる代表例ですので、後で詳しく説明します。

waterは固定的な形状を持たないので、すべて×にしました。ですが、同じ液体のcoffeeには、以下のような可算用法があるので、注意が必要です。

(14) Two coffees, please.

喫茶店などでは、coffeeを可算用法で用いることが可能になります。お店ですと、コーヒーは、ひとつの商品として同じ形状のカップに入れて客に出されるため、境界性や全体性が高まりますし、そのひとつひとつが対価を伴うので、売れば売るほど儲かる、つまりは繰り返し性も高まる状況があるのです。これに対し、自宅で煎れたコーヒーは、そのような事情が存在しませんので、やはり"two cups of coffee"としか言いようがないのです。

では、なぜfurnitureは「数えられない」のでしょうか。その理由を理解するには、まずfurnitureの意味について考え直す必要があります。

(15) a. Furniture is something that every home needs to give it style and comfort.

(www.streetdirectory.com; 2014/05/05)

b. The room was quite without furniture, and we had thought the entire house as bare.

(www.readmeridian.org/issues/10/10_Lost_Classic.pdf)

c. items such as chairs, tables, beds, cupboards, etc. which are put into a house or other building to make it suitable and comfortable for living or working in

(Cambridge Advanced Learner's Dictionary)

furnitureは、(15a)にみるように、家や部屋に趣きと住みやすさを与えるために欠かせないもので、ないと(15b)のように部屋がむき出しに感じられます。では、「家具」のない和室を想像してください。むき出しのような感じがするのでしょうか。逆にすっきりしているように私には思えます。どうも、英語のfurnitureの指し示す対象には、日本語の「家具」と若干のずれがあるようです。(15c)は辞書の定義を抜き出してきたのですが、住みやすく仕事にも適したものにすするためのものであると明示されています。Grimm and Levin (2011)も主張していますが、furnitureは居心地をよくするという機能が重要なのです。家や部屋を住みよくするための装具一式がfurnitureなのです。

ここでおもしろいのは、住みやすくするという観点からすると、和室の畳や障子も *furniture* に含まれるという点です。

- (16) Japanese furniture includes tatami mats, fusuma doors (sliding paper door), shoji screens (sliding paper screen), tansu, Japanese paper lanterns, Japanese low-tables, futon, and so on. Traditional Japanese furniture is usually placed in Japanese-style room (washitsu).

(<http://gojapan.about.com/od/japanesefurniture/a/japanfurniture.htm>; 2014/05/05)

上の例は、米国の情報提供サービスの会社が和室のスタイルを説明した文章から採りました。日本語で「家具」と言うとき、「畳」や「ふすま」を含めるでしょうか。畳やふすまは家具店で購入するものではなく、建具屋か工務店を通して買うものはずです。ですが、改めて考えてみると、畳やふすまは部屋を住みよくさせる装具一式なのかもしれません。

そして、部屋や家に生活のために備わった装具一式は、特定の形状を伴わない集合物ですので、そこに明確な境界を見出すことができません。また、個人に備わる *hair* (髪型) が個人の枠を越えて数え上げにくいと同様に、*furniture* も家や部屋をまたいで、同種のを並べ立てることがむずかしい(反復可能性が低い)のです。*furniture* の可算性が低いことには理由があります。訳語に関して付言すると、*furniture* は「家具」よりも「家具類」と言ったほうが、現実により近いように思います。

7. 表現の順序, 認知の順序: 英語を知り日本語を知る

さて、これまで英語の名詞の可算性について考えてきました。この章の最後に、名詞表現が世界をとらえるやり方の日英間の違いについて考えてみましょう。この点について、マーク・ピーターセンは『日本人の英語』のなかで興味深い指摘をしています。

- (17) 日本の英文法書では"a (an)"の「用法と不使用」を論じるとき「名詞に a がつくつかつかないか」あるいは「名詞に a をつけるかつかないか」の問題として取り上げるのが普通である。ところが、これは非現実的で、とても誤解を招く言い方である。ネイティブスピーカーにとって、「名詞に a をつける」という表現は無意味である。

英語で話すとき——ものを書くときも、考えるときも——先行して意味的カテゴリーを決めるのは名詞ではなく、a の有無である。そのカテゴ

リーに適切な名詞が選ばれるのはその次である。もし「つける」で表現すれば、「aに名詞をつける」としかいいようがない。「名詞にaをつける」という考え方は、実際には英語の世界には存在しないからである。

(マーク・ピーターセン『日本人の英語』)

ピーターセンが主張する内容がすぐに飲み込めたでしょうか。当然と言えば当然なのですが、私たちには母語をもとにして外国語を理解しようとする傾向があります。英語の冠詞が担う意味合いは、日本語母語話者にとっては明瞭ではありませんし、そもそも日本語には冠詞がありませんから、日英共通に見られる名詞を中心に考え、単音節の冠詞を付け足しとしてとらえる傾向が生まれるわけです。しかし、そのような考え方は英語の母語話者の見方とは隔たりがある、とピーターセンは主張します。

そもそも、母語の枠組みになぞらえて外国語を学ぼうとする態度は、外国語を学ぶ本来の意義からはずれません。外国語を教育課程のなかで学ぶ主要な理由は、母語とは異なる言語に接することにより、母語の知識を相対化する——世の中には母語とは違う見方や表現方法があることに気づき、翻っては母語に対する感覚・理解を新たにすることではないでしょうか。母語の知識によって外国語をゆがめて理解するのは問題です。

困ったことに、問題はそれだけにとどまりません。たとえば、"a cat", "some apples"という英語の名詞のことを中学校の教室では「1匹のネコ」「いくつかのリンゴ」と言うことが多いのではないのでしょうか。[冠詞] + [名詞]という語順に合わせて、[数詞] + [名詞]という並びの日本語を対応させるわけです。しかし、それは日本語としては不自然です。

- (18) a. 1匹のネコを飼いたいんだ
 b. ネコを1匹飼いたいんだ
 c. 1杯のカクテルが彼の人生を狂わした。

(18a)のように話す人はいないですよ。ふつう、私たちは(18b)のように言うのではありませんか。いや、単に「ネコを飼いたいんだ」と数詞を用いないのがもっとも自然です。数詞を名詞の前に持ってくると、(18c)のように数詞に特別な意味合いが生まれます。英語を学ぶ際に日本語の事実をねじ曲げる必要はないはずです。日本語の名詞を可算名詞だと勘違いさせるのと同様の、外国語を学ぶ本来の理由から外れた本末転倒がここでも見られるのです。日本の英語教育は、もっと日本語教育に寄り添うべきです。

ここで重要なことは、英語では〔冠詞〕＋〔名詞〕という語順に表れているように、名詞で表される当該の実体について、まず境界が明瞭な個物として認知できるか否かを認知し、それからその実体の種類について言及します。実際、"It's a ..., it's a ..."と名称が思い浮かべられないで困っている場合には、可算用法であることは認知されているものの、言おうとする実体がどのような名称なのか明瞭に想起できていないようです。英語では、可算か不可算かの認知のほうに、当該の実体の種類の認知よりも先に来るのです。(17)でピーターセンが主張したかったのは、そういうことだと思います。

他方、日本語の名詞表現は、当該の実体についてその種類を指定し、それから必要に応じて数に言及します。必要がなければ数については何も言いません。そのような場合は数の概念が想起すらされていないのです。そして、いざ数に言及する場合は、「一個」「一本」「一膳」「一脚」「一竿」というように、英語よりももっと細やかに数の概念を指定します。

つまり、名詞で表現される実体のとらえ方が日本語と英語とでは大きく異なるのです。日本語母語話者がしばしばつまづく名詞の可算と不可算の問題を英語学の観点からじっくり眺め直すと、このように外国語を学ぶ意義の核心に触れることもできるのです。そのようなことに気づくことなく、しかもたとえば日本語の名詞は可算名詞だと誤解したままでは、ことばに対して理解を深める機会が目の前にありながら、その大切な機会をみすみす逃していたことになります。英語が見せる姿を英語学の見地から考えていくことの意義(一端)が体感できたでしょうか。だとすれば、この章のねらいは成功したことになります。

以降の章でも英語学の考え方がいろいろと提示されます。英語について考えることでことばの不思議について触れる、そしてそのことを通して論理的に批判的に考える手法について実感する。それが本書全体のねらいです。

参考文献

- エイザー, ベティ・S. 2005. 『エイザーのわかって使える英文法 下巻』 桐原書店.
- 大西泰斗, ポール・マクベイ. 2011. 『1億人の英文法』 東進ブックス.
- 久野暉, 高見健一. 2004. 『謎解きの英文法: 冠詞と名詞』 くろしお出版.
- 田中茂範. 2013. 『表現英文法』 コスモピア.
- ピーターセン, マーク. 1988. 『日本人の英語』 岩波新書.

- 綿貫陽, 宮川幸久, 須貝猛敏, 高松尚弘. 2000. 『ロイヤル英文法 (改定新版)』
旺文社.
- Grimm, Scott and Beth Levin. 2011. Between count and mass: *Furniture* and other
functional collectives. Paper presented at 85th Annual Meeting of the Linguistic
Society of America, Pittsburgh, PA, January 6-9. (Distributed at
<http://web.stanford.edu/~bclevin/lsa11talk.pdf>)
- Lagnacker, Ronald. 1987. Nouns and verbs. *Language* 63: 53-94.